ラブレター　春野天使編

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブレター　春野天使編

【Ｎコード】
Ｎ５１７８Ａ

【作者名】
春野天使

【あらすじ】
隣りのクラスの沙紀に密かに思いを寄せる俊哉は、ある日ラブレターを書いて沙紀に渡そうとする。しかし、親友信吾の勘違いで同姓の静香に渡されてしまう。静香は以前から俊哉のことが好きで、俊哉にすぐにＯＫの返事を出す。俊哉は疑問を抱きながらも静香と付き合うことになる。

（前書き）

同じ設定、登場人物で小説を書いてみよう！という企画の第一弾です。

開け放った教室の窓から心地良い春の風が吹いてくる。風は甘い花の香りとともに、生徒達の明るい笑い声も運んでいく。

昼休み。俊哉は頬杖をついて、窓から校庭を眺めていた。俊哉の視線の先には、ある少女の姿がある。彼女の名前は鈴木沙紀。沙紀は三年A組。俊哉の隣りのクラスの生徒だ。沙紀は笑顔を振りまきながら、他の女生徒達と楽しそうに喋っている。

長く艶やかなポニーテールが風に揺れている。はじける笑顔が眩しい。俊哉は、はぁと何度目かの吐息を吐く。中学に入学した日以来、俊哉の片思いはずっと続いている。一度も同じクラスになったことはなく、いつも遠くから見ている毎日。明るく優しい沙紀は、皆の人気者だ。男友達だって多い。彼氏が出来る日もそう遠くはないはずだ。

「はぁ……」

春の愁いのようなもやもやした感情がわき起こる。

――このまま告白も出来ないで卒業するのかな?……

まだ三年の四月だというのに、俊哉は来年の卒業式のことを思い描いてしまう。

「俊！　なにボケーッとしんだ?」

突然大きな声がしたかと思うと、クラスメイトの信吾がドタドタと俊哉の元まで走って来た。俊哉の感傷的な気分は吹っ飛んでいく。

信吾は、去年の三学期に俊哉のクラスに転校してきた。家が近所ということもあって、自然と友達付き合いをするようになった。三年でもまた信吾と同じクラスだ。陽気で積極的な信吾は、もうすっかり新しい学校にとけ込んでいる。転校生の面倒を見ていたはずの俊哉が、今や信吾に面倒を見て貰っているという感じだ。

「何か悩みでもあんの?」

信吾は窓から身を乗り出して、俊哉の視線の先を見つめる。

「何でもないよ」
俊哉はクルッと窓に背を向ける。
「分かった！　お前好きな奴出来たんだな」
「ち、違う！」
キッパリ否定するが、俊哉の顔は心に正直に反応し赤く染まっていく。
「相手は誰だよ？　よそのクラスの女子だよなぁ」
信吾も食い入るように女子生徒達を見ている。
「……」
俊哉はふと心配になる。信吾は並の容姿だが、行動派で明るい。クラスの女子にもかなり人気がある。もし、沙紀にアタックしたら彼女はＯＫして付き合うことになるかもしれない……沙紀を取られる！
「あ、あの。うん……」
俊哉は、さらに顔を赤くして頷く。
「はぁ？」
信吾は俊哉に視線を移し、キョトンとした顔をする。
「何が『うん』なわけ？」
「あの、だから……好きな子が出来た」
俊哉は耳まで真っ赤にする。
「やったな！　俊哉！」
信吾は俊哉の背中をバシッと叩いて笑う。信吾の大きな手に叩かれ、俊哉は前につんのめってしまう。
「で、どの子？」
信吾はもう一度窓の外を覗く。
「あの――」
俊哉が覗いた時には、既に沙紀達の姿はなかった。
「なんだぁ、いなくなっちゃったぜ。誰だよ？」
「……三年Ａ組の鈴木沙紀……」
俊哉は深呼吸すると、ようやく打ち明ける。

「鈴木沙紀？　知らないなぁ」
「お前は、今年転校したばっかだから……す、すごい可愛いんだ」
沙紀のことを思い描き、俊哉顔は更に紅潮する。
「はぁん、頑張れよ、俊哉！　さっそくメルアド聞いて来いよ」
「ば、馬鹿な……いきなりそんなの聞けるか……」
俊哉はモジモジと手を弄ぶ。
「なんで？　一番手っ取り早いじゃん」
「あ、でも、嫌がられるかもしれないし……に、苦手なんだよメールって」
「俊哉はアナログタイプだもんなぁ」
信吾はからかうように笑って腕組みする。
「そんじゃ、メールはメールでも本物のメールってのはどう？」
「本物のメール？」
「そ、お手紙」
「手紙？……」
確かにメールより印象に残るかもしれない。習字を習った経験もあるから、俊哉は字には自信があった。それに、じっくり考えながら書ける。俊哉にはピッタリの告白方法かもしれない。
「手紙か。分かった書いてみるよ」
「頑張れ！　応援するぜ！」
はにかみながら頭をかく俊哉に、信吾は大げさに拍手をおくる。

『中学に入学した時から、君のことが好きでした。
いつも明るく笑っている元気な君が大好きです。
毎日君のことを考えてばかりで、勉強にも身が入りません。
ずっと君のことだけを見つめています。
ストーカーだとは思わないでください。
君のことが心から好きなんです。
どうか、僕の気持ちを分かってください。

もし、僕と付き合っても良いと思うなら、僕に返事を下さい。
君からの返事を待っています。
三年Ｂ組　山村俊哉』

学校から帰って、俊哉は部屋に閉じこもり沙紀への手紙を書き続けていた。ノートの切れ端に何度も何度も下書きして、ようやく一枚の短い手紙を書き終えた。ゴミ箱は書き損じた紙くずで溢れかえっている。
俊哉はフーッと肩の力を抜き、家に置いてあった便箋に、清書した手紙を封筒に入れる。二年間の沙紀への思いを込めた手紙。
――どうか、返事をくれますように……
俊哉は手紙に向かって念じる。

翌日。
俊哉は眠い目をこすりながら学校へ向かった。昨夜は書いたラブレターのことが気にないり、ほとんど一睡も出来なかった。
――どうしよう。いつ渡そうか……
考えながら学校に到着してしまった。沙紀は自転車通学で登校時間も俊哉とは違う。登校途中に手渡すというパターンは逃してしまった。
――帰りに渡そうかな……
となると、手紙のことが気になって今日の授業は授業どころじゃない。
――いや、ダメだ！　そんな長く待てないよ。緊張し過ぎて死にそうだ！
あれこれ考えながら、俊哉は教室に入って行った。とぼとぼと歩いて自分の机の上にドサッと鞄を置く。昨日長い時間をかけて書いた手紙は、鞄の中に大切にしまってある。清書した後は読み返しもしないで、そのまま封をした。自分が書いた文章が恥ずかしくてと

ても読み返す勇気はなかった。
「よっ、　おはよ！」
元気な声とともに信吾が現れた。
「手紙書いたか？」
頬杖ついてボーッとしている俊哉に目をやると、信吾は俊成の鞄を勝手に開ける。
「あっ！　ちょっと」
俊哉がとめる間もなく、信吾は鞄の奥から沙紀宛ての手紙を取り上げた。
「おっ、真っ白な大人の手紙だな」
信吾は、表には何も書かれていない手紙を眺める。
「親の手紙しかなくて……」
「早く渡して来いよ。授業始まっちゃうぜ」
「えっ！　い、今から？……」
「今じゃなきゃいつ渡すんだよ？」
「……そ、それはそうだけど」
俊哉は恥ずかしげに目を伏せる。
「しょうがねぇなぁ。じゃ、俺が渡して来てやるよ」
信吾は手紙をヒラヒラさせて笑う。
「あ、ちょっと、信吾はどの子か知らないだろ」
そのまますぐに出ていこうとする信吾を俊哉は呼びとめる。
「あ、そっか。名前なんだっけ？」
「……鈴木沙紀……」
周りをキョロキョロ見回しながら、俊哉は小声で呟く。
「え？　何て言った？」
「だから……鈴木沙紀」
俊哉は顔を真っ赤にしながら、信吾の耳元で囁く。
「おぉ、分かった、分かった。鈴木さんだな！」
信吾の声のでかさに俊哉はビクつく。
「じゃ、ちょっと行って渡して来てやるよ！」

「あっ……」
言うが早いか信吾はもう走って教室を出て行っている。
――いいのかなぁ？　これで……
俊哉は信吾が無事に沙紀に手紙を届けてくれるか気になったが、直接手渡さなくてよくなりホッとする。
――あぁ、でも、返事が恐い。……今日は沙紀と顔合わせられないや……
俊哉には新たに別の心配事が出来て、考えると胸がドキドキとしてきた。

信吾はA組の教室まで走って行き、入り口でキョロキョロと中を見渡す。何人かの生徒達が席に着いたり、雑談していた。
「えーと！　鈴木――？」
信吾は教室に向かって声を上げる。
――あれっ？　下の名前何だっけ？　えーと？　ま、いいか名字で。
「鈴木さーん！」
信吾は手紙を振りかざしながら、声をかけた。
「あ、はい！」
入り口近くの席に座っていた少女が驚いた顔をして立ち上がった。
「鈴木さん？」
「あ、はい……」
「三年B組の山村俊哉からお手紙です！」
信吾は笑顔でそう言うと、手紙を差し出した。
「えっ！　俊哉君から？……」
少女は更に驚いた顔を信吾に向ける。
「これってラブレターだと思うよ！」
「ラ、ラブレター！　俊哉君から！」
少女は顔を真っ赤にすると、手紙を受け取り慌てて席に戻っていく。信吾はその様子を面白そうに見ていた。

――俊哉君だってよ。あっちも気があるみたいじゃないか。なんか、俊哉の言ってたタイプとは違うみたいだけどなぁ。まぁ、良い感じだ。

使命を果たした信吾は、満足感に浸る。

「おはよー！」

信吾が去った後、A組の教室に沙紀が元気良く入って来た。

「あれ？　鈴木さんどうしたの？」

席に着き、顔を真っ赤にして俯いている少女に沙紀は声をかける。

「気分でも悪い？」

「な、なんでもない……」

少女は目を伏せたまま低く答える。

「そう」

沙紀は少女を気にしながら、自分の席の方へ歩いていく。

「沙紀、おはよ」

沙紀の友達が何人か集まって来る。

「さっき隣りのクラスの子が鈴木さんって呼んでたけど、沙紀のことじゃないよね？」

「え、そうなの？」

沙紀はキョトンとした顔を向ける。

「鈴木さんは沙紀と静香二人いるでしょ」

「でも、鈴木さんって言ったら静香のことだよね」

「そうそう、沙紀は沙紀で、静香は鈴木さんだもんね」

「同じ鈴木でも、沙紀と静香じゃ別人だし」

少女達はチラチラと静香の方を見ながらクスクスと笑う。静香はじっと席に座って、白い手紙を胸に握りしめていた。

「暗いよね、鈴木さんって」

「鈴木さんの側に行くとこっちまで暗くなっちゃいそう」

「やめなさいよ。鈴木さんは大人しいだけじゃない。まだクラスに馴染んでないのよ」

正義感の強い沙紀は、陰口悪口は許せず口を挟む。
「そうかな？　私去年も同じクラスだったけど、ずーと暗かったよ」
その時、始業のチャイムが鳴り響き、生徒達は各自の席へと散っていった。

――どうしよう。俊哉君からラブレターもらうなんて！
静香は俊哉の手紙をこっそりと読み、舞い上がっていた。読み返すたびに頬が赤くなり心臓がドキドキしてくる。
――俊哉君も私のことが好きだったなんて……全然気付かなかった。ずっとずっと私、俊哉君が好きで……でも、今まで打ちあけられなくて。
先生の話など静香の耳には入ってこない。顔が自然とほころび笑顔になってくる。
――何て返事書けばいいんだろ？　手紙書くなんて初めて……
静香は机の下隠し持った俊哉の手紙をギュッと握りしめる。

「おい、信吾。ちゃんと渡してくれただろうな？」
授業の合間の休み時間に、俊哉は信吾にたずねる。
「渡したさ。明日は返事もらえそうだな！」
信吾は俊哉にブイサインしてみせる。
「彼女、お前の手紙もらってすごく嬉しそうだったぜ」」
「そ、そうか？……」
俊哉は頭をかいて下を向く。
「ああ、けど、なんかイメージ違ったなぁ」
「イメージ？」
「お前は明るいタイプが好みかと思った」
「？　沙紀はすごく明るいよ」
「沙紀？　あぁ、下の名前沙紀だったよな。さっき思い出せなかったよ」

アハハと信吾は笑う。アハハって……俊哉はふと不安な気持ちになる。
「？……何だよお前どうやって渡したんだ？」
「名字で呼んだよ、鈴木さーん！って」
「鈴木さん……」
「そう。鈴木で良いんだろ？　名字」
「あ、うん……いつもは沙紀って呼ばれてるけどな」
俊哉は何かひっかかったが、沙紀は鈴木沙紀だから間違いではない。俊哉は、A組に鈴木さんが二人いるということに、その時は気付かなかった。
「良かったなぁ、俊哉！　明日から彼女が出来るんだよなぁ～俺もがんばろっと！」
信吾は俊哉の肩をバシバシと叩く。そのたびに俊哉の体は前に倒れそうになる。
「まだ彼女だなんて……返事ももらってないのに」
「絶対大丈夫だよ！　自信もてって！」
「……あぁ」
信吾の半分ほどの自信が自分にもあれば、と俊哉は思う。手紙を渡したは良いが、もう返事のことが気になり始めた。今夜も眠れない夜になるだろうと、俊哉は確信する。

予想通り、俊哉は寝不足な朝を二日連続で迎えた。
朝から欠伸ばかり出る。沙紀からすぐに返事が貰えるかどうかは分からない。だが、自分の気持ちは伝えた訳で、俊哉は沙紀の気持ちを早く知りたかった。
昨日は、沙紀とは会わなかった。俊哉が沙紀を避けていたせいもあるが、どうしても顔を合わせられなかった。
――今日は、ちゃんと会わなきゃな。
学校に着いた俊哉は、高鳴る胸の鼓動をおさえつつ、真っ直ぐに

A組の教室に向かった。
――落ち着け！　きっと沙紀はＯＫしてくれるはずだ！　必ず！
俊哉はゴクリとつばを飲み込んだ。
「あっ、おはよー！」
後から明るい声が響く。俊哉はビクッと体を緊張させる。いつも遠くで聞いている耳に心地よい声。そして、笑顔。
「！……」
振り返った俊哉の目の前に、沙紀のはじける笑顔があった。
「おはよう、Ｂ組の山村君だよね？」
「……うん。あ、お、おはよう」
俊哉と沙紀は顔を見合わせる。俊哉の顔は見る見る赤く染まっていく。
「あ、あの……昨日の返事」
「え？」
「……」
沙紀は笑顔のまま、不思議そうに首を傾げる。しばらく目と目を見つめ合う二人。
「じゃあね」
教室の中から沙紀を呼ぶ声がすると、沙紀は軽く俊哉に手を振って友達達の方へ走って行った。
「あ？……」
――何で？　反応なし？　手紙のことなんか知らないみたいじゃないか
不審に思う俊哉の背後で、また人の気配がした。
「……山村君」
小さな低い声がし、俊哉は何かゾクッとして後を向く。そこには俯いた静香が立っていた。
「はい？」
「……昨日はありがとう」
「え？」

静香は視線を落としたまま、手を震わせながら手紙を差し出す。
「手紙？」
俊哉は口をポカンと開けて、静香の様子を見守る。
「わ、私の返事です。受け取ってください！」
静香は俊哉の手に手紙を押しつけると、俯いたままサッと教室の中に駆け込んでいった。
「あ、ちょっと……？」
俊哉は静香の手紙に目をやる。
「あっ！」
封筒の裏には『鈴木静香』と書いてある。
――鈴木！　信吾の奴まさか！
嫌な予感を感じながら、俊哉は封を開ける。
「はぁ……」
便箋の文字を目にして、俊成は深くため息をつく。便箋には短い文が一文書かれてあった。

『私もずっとあなたのことが好きでした。どうか、私と付き合ってください。

鈴木静香』

――どうするよ……
俊哉は始業のチャイムが鳴るのも気付かず、じっと手紙を見つめていた。

今更、手紙を渡す相手を間違えましたとは言えなかった。
『鈴木沙紀』と『鈴木静香』を間違えたとは……静香にはどうしても言えない。
俊哉は静香のことは一年の頃から知っていた。確か一年の時は同

じクラスだったような気もする。だが、地味で目立たない静香のことを気にかけたことは一度もない。話したことさえなかった。　その静香がずっと俊哉のことを好きだったとは！　俊哉は意外だった。誰かに好かれるというのは妙な気持ちだ。嬉しいとまではいかないけれど、嫌な気分はしない。

「……」

俊哉は横を歩く静香にチラッと目をやる。

ラブレターの返事をもらった日から、俊哉は静香と行動を共にすることが多くなった。登下校には必ず一緒に帰るし、メール交換もしている。今度の日曜日は初デートの約束までしている。

――これって、付き合ってるってことだよな？　けど、俺、静香のこと好きなのか？

何度も俊哉は自問自答してみるが、その答えは分からない。嫌いではないが好きでもない。中くらいのどっちでもない状態なのだ。

――付き合っているうちに、段々好きになっていくのかも？　あ、でもその逆の場合だって……

俊哉と静香は肩を並べ黙々と歩いて行く。口数の少ない者どうしでは、会話が弾むこともない。だが、重苦しいという雰囲気でもない。静香はずっと笑顔だし、俊哉の側にいるというだけで嬉しそうだった。

――嫌な奴じゃないしなぁ。可愛いっていうか？

微妙だった。胸のときめきもドキドキもないが、居心地が悪いわけでもない。

「おーい！　俊哉！」

ゆっくりと歩く二人の後から、リンリンという自転車のベルと信吾の馬鹿でかい声がした。

「相変わらずラブラブだなぁ！」

信吾のケラケラと笑う声がする。

「うっさい――――」

振り向いた俊哉は、途中で言葉を飲み込んだ。自転車を漕ぐ信吾の後に沙紀が乗っている。信吾の腰に手を回して二人乗りしている。
「なんで？……」
何故、沙紀の自転車に信吾が乗っているのか？
「俺達もお前等に負けないくらいラブラブになるからな！」
「え？」
信吾はハハハと笑う。
「じゃあね！」
沙紀も否定せず、信吾と一緒に笑っている。ポカンと突っ立っている俊哉をおいて、信吾と沙紀は自転車のベルを鳴らし慌ただしく去っていく。
「……沙紀さん達、お似合いのカップルね」
走り去って行く二人の自転車を見つめながら、静香がボソッと呟いた。
「え？……」
――何？　信吾の奴いつの間に沙紀と……
俊哉は軽くショックを受ける。いや、かなりショックだった。沙紀のことの気持ちの整理もつかないうちに、沙紀と信吾が付き合うとは。
――裏切られた！　……けど、これは裏切りとは言えないのかな？
信吾は、俊哉が沙紀のことを好きだとは知らなかったはずだ。その信吾が沙紀と付き合うことになったとしても、俊哉がとやかく言える筋合いもない。俊哉の複雑な気持ちがより一層複雑になっていく。
「……そう思わない？」
ことの成り行きを全く知らない静香は、無邪気に微笑み頬をピンクに染める。
「あ、あぁ、そうだね……」
ふと、静香は俊哉の腕に手をからめてくる。
「私たちも……」

ギュッと俊哉の腕を掴む。大人しい静香の割りには、大胆な行動だった。

「……帰ろうか」

俊哉は静香と腕を組み、歩き出す。

――これでいいのか？……

こうなったのも運命？　初恋の相手とは結ばれないものだということ？　俊哉にはいくつもの疑問符が頭を駆けめぐるが、とりあえず今は隣りに静香がいる。

――これもいいのかなぁ？　多分……

二人の長い影が後で重なっている。夕暮れで赤く染まりかけた空を見つめながら、俊哉は静香と腕を組んで歩き続けた。

完

（後書き）

読んで下さってありがとうございました。
最初に決めた設定とは微妙に違ってしまいました。（^^;）書きながら展開に悩みました。短めの短編のつもりだったけど、かなり長くなったような気もします。
他の方の小説も早く読んでみたいです。（^^）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5178a/

ラブレター　春野天使編

2010年10月8日12時10分発行